

国語学研究 第二十六号（一九八六）抜刷

埼玉県南東地方の言語伝播

—— パタン研究の視点から ——

佐藤 貴裕

四〇

佐藤 貴裕

分布を考察していきたい。

二 方法と資料

本稿では、資料として埼玉大学の「埼玉県言語地図^{注3)}」を用い、埼玉県南東部地方の言語伝播・分布を考察することにした。その理由は以下に述べるようなことである。埼玉県南東部地方の放射中心地は、日本を代表する大都会・東京であって、その威光は非常に大きなものであり言語伝播も強力に行なわれるものと思われる。したがって、他の放射中心地の改新が伝播するという可能性をかなりの程度に考慮しなくてよいと考えられる。そして、放射中心地が一つであることから、かなり把握しやすい形で伝播・分布の有様を知ることができると思われる。以上の点で、筆者が容易に検討できる資料のなかでは最も理想的なものと考えられた。また、絶大な威光を持っている東京にごく近い埼玉県南東部地方にでさえも「違例的伝播・分布」と見られる現象が存在することになれば、他の地方においても同様の現象が起こりうることが考えられよう。そして、埼玉県南東部地方で推定される違例的伝播・分布の要因も他の地方の同様の現象についてもあてはまるものである可能性は十分にある。ひいては、言語変化一般について資するところがあるような「要因」を提示することができるかもしれないと考えられるのである。

- そこで、本稿で扱うことがらを確認しておく、次の二点となる。
- 1 埼玉県南東部地方の伝播・分布の一般的な有様を捉えること。
 - 2 埼玉県南東部地方における「違例的伝播・分布」の解釈を行なうこと。

まず、1を客観的に提示するため、話者から得られた回答を数量

的に扱うことにした。埼玉大学の一九八〇・八二年の調査結果『埼玉県言語地図』をもとに集計したのが図2である。話者552人から得られた語形のうち、東京の語形にH、そうでないものは0として話者ごとの平均を算出した。さらに地図上のマス^{注4)}ごとに平均を算出した。これは話者の回答の個人差を捨象して、この地方の伝播・分布の状況の平均的な姿を描きだすためである。なお、集計に用いた地図は、語形的地域差が認められるもの・無回答の地点が著しく多くないものなどとし、63枚を使用した。また、調査票の記述で、東京の語形と方言形とが併記されている場合、東京の語形は集計しなかった。これは、調査者全員が東京の語形を話者から聞きだしているとは限らず、調査票の上では方言形単独の回答であっても、東京の語形と方言形との併用が実際を反映しているとも考えられるためである。このような処理のために、東京の語形の浸透度が過小評価されることになった。その反面、方言をよく保存する地域と東京の語形をよく取り入れる地域とのコントラストが明瞭になり、伝播・分布の傾向が読みとりやすくなったと思われる。

三 埼玉県南東部地方における言語伝播・分布の傾向

まず、図2が埼玉県南東部地方の言語（東京語）伝播・分布の傾向を反映しているかどうかを検討しておく。

地図の東南部が東京に最も近いためか高い数値となっている。この地域は明治以前から中山道や日光御成街道などがあり交通の要所であった。明治以降も東北本線・高崎線・京浜東北線などの鉄道が引かれ、東京のベッドタウンとして発展してきた。そのためであった埼玉県^{注5)}のなかでは最も人口が集中している中心地域である。した

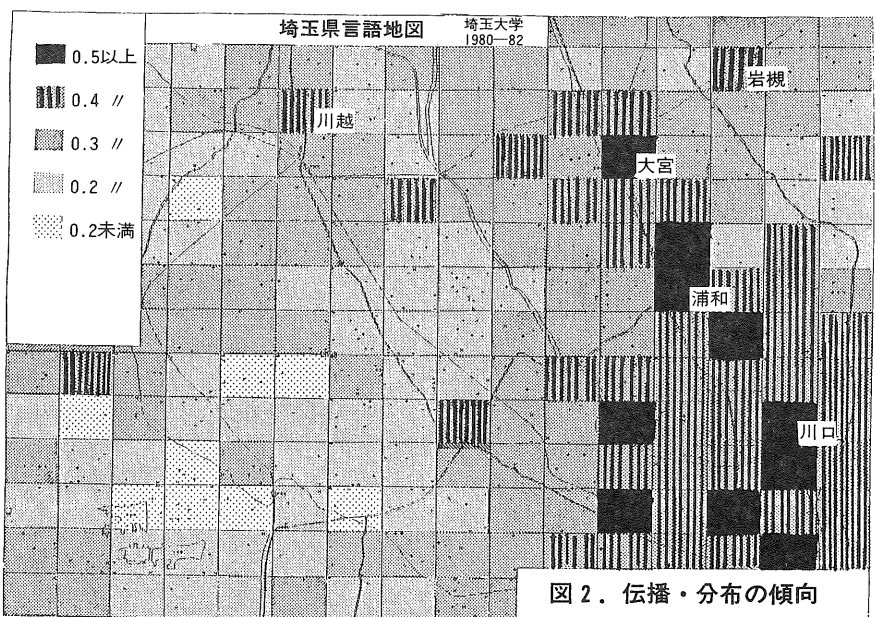


図2. 伝播・分布の傾向

がって東京の語形がよく分布しているのも納得がいく。北東にある大宮も事情はほとんど同じようである。概念図からも知られるように種々の鉄道が入りこんでおり交通のかねととなっている。また、さらに北東の岩槻も高い数値である。ここは中世に太田道灌が築城してから城下町として発展し、江戸時代は宿場町として栄えたところである。

荒川の西側では川越が目立っている。ここも太田道灌の築城とされ、江戸時代にも親藩・譜代の大名によって知行された町である。また、特産品も多く、江戸とのつながりもかなり強く、言語の伝播のうえでもときに南東の地域よりも早く東京の語形を受け入れることがある。所沢も古い町ではあるが、予想したほどには高い数値とはなっていない。東京語を受け入れるには、交通の頻繁なこと・江戸や東京とのつながりが緊密であることなどが必要条件であるようだ。以上のことから、図2の示す分布の傾向は、各都市・地域の事情によく符合していることが知られる。そこでこの地図は、埼玉県南東部地方の一般的な言語伝播・分布の傾向を表わしているものと考えてさしつかえないようである。そして地図上の濃淡からは、荒川の東側では南から北への伝播が認められる。これに対して西側では南から北への流れはあまり目立たない。むしろ、北部の川越などが東京の語形を取り入れていることが知られる。この点、東側と異っているのが注意が必要である。

四 埼玉県南東部地方における違例的な伝播・分布の考察

四・一 明々後日——同音衝突との関り

図3を見られたい。「明々後日」を意味する語形の分布図である。

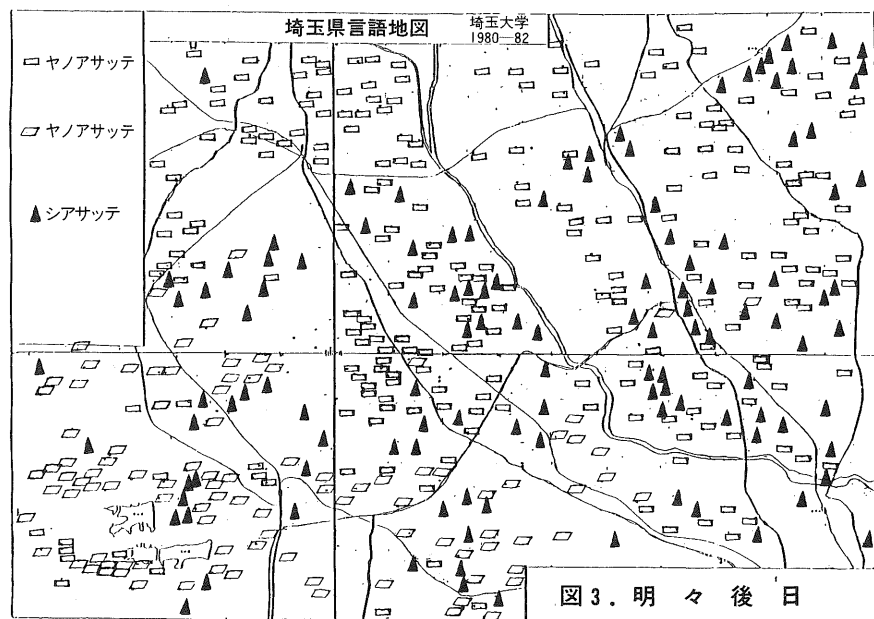


図3. 明々後日

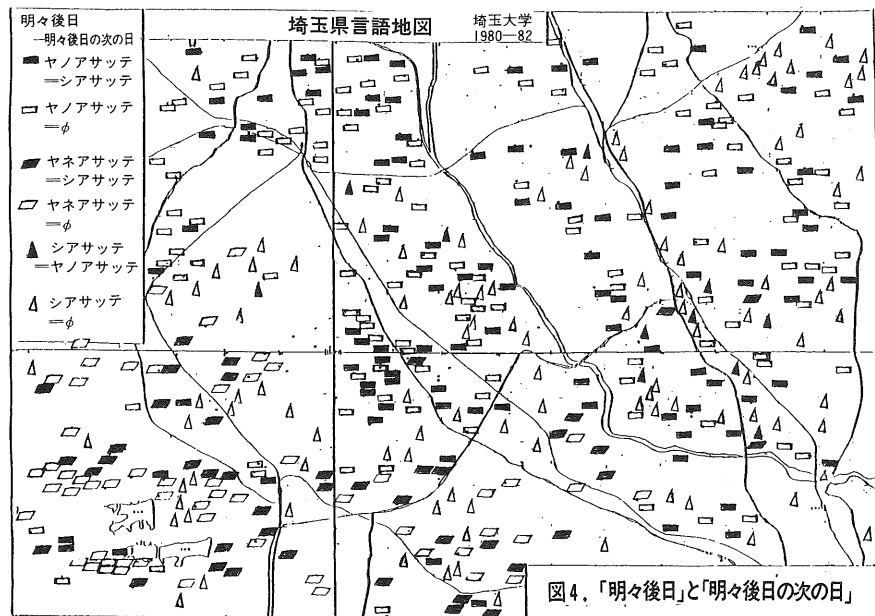


図4. 「明々後日」と「明々後日の次の日」

東京の語形シアサッテは、荒川東側の各地に分布があり、その領域も先の図2の傾向にあっているようである。が、地図の東西を比べてみると、シアサッテの伝播の進行度（北上の度合）はほぼ拮抗している。シアサッテの分布は、東側ではおおむね図2の0.4以上の地域に限られ、0.3以下の地域では在来ヤノアサッテが分布している。これに対して、荒川西側では0.3・0.2である地域にもシアサッテが分布しているのである。同じく、西側で特異なのは、図2で高い数値であった川越の分布である。ここでは意外にもシアサッテの分布はほとんどまったく得られておらず、むしろ在来の語形ヤノアサッテの分布が確固としており、シアサッテの分布をはねつけているようにも見られるのである。これらの点で「明々後日」のシアサッテは違例的な伝播・分布を示していると考えられるのである。

この違例的な伝播の要因として考えられるのは「明々後日」と「明々後日の次の日」の言い分けに関することであろう。周知のとおり、「日本言語地図」285・286図などでは、東京の言い分けかたとして「明々後日」シアサッテ・「明々後日の次の日」ヤノアサッテ（以下、シーヤと記す）がみられ、埼玉ではヤノ（ネ）アサッテ・シアサッテ（同じく、ヤーシ）となっている。すなわち、言い分けるべき二つのことからの双方で同音衝突の可能性があるのである。このような二重の同音衝突が、語の伝播にどのような影響を与えるのか検討していくことから始めたい。

まず確認しておきたいのは、東京にきわめて近いこの地方になぜこれほど東京の語形が伝播しにくいのか、という点である。シアサッテという語形は酒落本『弁蒙通人講釈』（安永九（一七八〇）年）の

きんこれはきつこと。九日アいつだ。あしたと、あさって

は八日。しあさってだね。（『酒落本大成九』 三八〇頁下段。句読点は私に付した）

とあるのが古い例である。このときから二〇〇年ほどたった今日においても図3にみるほどしか分布がないのは、江戸・東京のめざましい発展を考えると不可解なようにも思われる。そこで、埼玉県南東部地方におけるシアサッテの伝播の進行度を、図3における分布数などから確認しておきたい。

まず、在来のヤノ（ネ）アサッテは332地点であるのに対し、シアサッテは117地点であった。たしかに、シアサッテの分布は少ないようである。さらに在来の体系と東京の体系の勢力をみてみよう。図4を見られたい。図3に「明々後日の次の日」の分布図を重ねあわせたものである。シアサッテ明々後日の地点は三角形で、ヤノアサッテなどは四角形で示した。また、「明々後日の次の日」の回答が得られた地点はベタ記号を、得られなかった地点は白ヌキの記号を与えた。一見してわかるようにベタ記号と白ヌキ記号の分布は入り乱れていて、それぞれ固有の分布領域を有していない。したがって、分布の上からは判断しがたいので数の上から勢力状況をみていく。在来の体系ヤーシを回答した地点は155地点である（ヤノアサッテ・シ110地点、ヤネアサッテ・シ45地点）。これに対して東京と同じシーヤを回答した地点は12地点であった。つまり、東京の体系をそっくりそのまま受け入れたのは、全地点数（552地点）のうち2.2パーセントに過ぎないのである。このように埼玉県南東部地方におけるシアサッテ明々後日・シーヤ体系の伝播は、遅々としたものであるので

今みたように東京の体系シーヤは受け入れずらいもののようであ

る。さらに、「明々後日」の語形は得られたが「明々後日の次の日」の語形が得られなかった地点の数から検討していききたい。在来^ノ（ネ）アサツテを回答した地点のなかで、「明々後日の次の日」が回答されなかった地点は17地点であった（ $33.3 \sim 55.5, 53.3\%$ ）。これに対し、東京の語形シアサツテ明々後日を受け入れた地点では105地点（ $117 \sim 12.8, 89.7\%$ ）にもはるのである。つまり、「明々後日の次の日」の語形が得られなかった割合が高いのは、東京の語形を受け入れた地点のほうなのである。このことから、埼玉県南東部地方においては、東京の語形を受け入れたために「明々後日の次の日」の語形を失った地点が多いということができそうである。また、おそらくはシアサツテ明々後日の侵入によって、在来^ノ（ネ）の言い分けもかき乱されたものと考えられ、その結果、「明々後日もその次の日も、シアサツテと言ったりヤノアサツテと言ったりする」と回答した話者も多かったし、無回答の地点もかなりあった。

このような事態の原因は、やはり、二重の同音衝突が実際に起こってしまったことにあるのだろう。筆者は、ヤノ（ネ）アサツテ明々後日を回答した地点を在来^ノの言い方を保っているかのように述べてきた。が、このような事態がみられることから、本来の意味で在来の語形を保っているのはヤノシを回答した地点だけである。ヤノ（ネ）アサツテ明々後日しか回答されなかった地点は、むしろ「明々後日の次の日」の語形を捨てて同音衝突による混乱を回避した地点だと言うのがふさわしい。そしてまた、シアサツテ明々後日だけを回答した地点も同様の事情があったと考えられる。東京の語形を取り入れたと積極的に認めるよりも、同音衝突による混乱を慮って明々後日の語形しか取り入れられなかったと考えるのが自然のように思われる。

四・二 地蜘蛛——命名法の伝播

図5を見られたい。木の幹の地面との境に袋状の巣を作って棲息している「地蜘蛛」の語形の分布図である。ジグモの分布は極めて弱く、13地点しかない。また、固有の分布領域も浦和近辺にあるようだが、やはり弱いものである。ジグモの異名であるツチグモも、ややまとまった分布を持っているようにも思われるが、荒川東側の南部には分布がなく、東京のツチグモとは連続していない。このような点で図5の伝播・分布の傾向は図2とは異り、違例的なものと思われる。この違例的伝播はどのように解釈できるであろうか。

まず、分布する語形の整理からはじめよう。荒川東側に比べて西側は回答の得られた地点の密度が高い。その回答のうち、一番大きな勢力となっているのが、南部に多いハラキリカンペーと、その北側のカンペー（グモ）である。ところでこの「カンペー」という語形・形態素は、『仮名手本忠臣蔵』の早野勘平のことだという話者が少なくなかった。勘平は、切腹するいわれがないのに早合点で一命を落とすことになる。「地蜘蛛」も、巢から出されてのひらでもてあそばれているうちに、自らの足で腹部をかき切ってしまう。このような類似点があることから「地蜘蛛」を表わすのにカンペーが用いられたのである。また、このような「地蜘蛛」の習性はハラキリ（グモ）・サムライ（グモ）などの語形をも生み出したのである。ところで、これらの語形のうち、ハラキリ・カンペー・ハラキリカンペーなど（以下、ハラキリ類）は、荒川西側だけではなく東側の岩槻近辺にもみられる。したがって、これらの語形は東西に分断されており、ハラキリ類の語形が一時代前のものであることを示してい

れる。

また、図4から次のようなことも推定しうるだろう。まず、「明々後日の次の日」で無回答であった地点は全域にわたっていることから、東京の体系が、地理的な分布という外形は備えていなくとも、この地方の話者には意識されるようになっていたことが考えられる。さらに「明々後日の次の日」を回答しなかった地点と回答した地点とは明確な分布領域をもってはいなかった。このことから、体系（明々後日—明々後日の次の日）のうちの一方の語形を削除したり保存したり新しく取り入れたりするのは、話者個人の選択にまかされている面が大きかったと考えられるのである。すなわち、「威光」による伝播のような地理的な契機でもなく、学区内で同じ言い方となっているような集団性によっているのでもないのである。

したがって、「明々後日」における違例的な伝播は次のように解釈されるであろう。荒川の東西で伝播の進行度が拮抗してしまうのは、新語形の採用・在来体系の保存・体系の部分的な改新削除などの、同音衝突による混乱を回避するための手段の選択が話者一人ひとりに任されている傾向が強いからである。川越の違例的な分布は、一見すると古態を保っているかに見えるが、それだけではなく、同音衝突による混乱を避ける手段であったと考えられるのである。

このように考えることがゆるされれば、「明々後日」の例で言えるのは次のようなことであろう。ある語がたとえ強大な「威光」を背景に伝播しようと、同音衝突の起こる場合には、必ずしも正常でスムーズな伝播をするわけではない。そしてこのことは、裏を返せば言語使用者が主体性を発揮して中央の改新を吟味することがあるからだと考えられよう。

る。そこで次に、分断した新しい語形についてみていきたい。

新しく分布したと見られる語形は、ハラキリ類の分断ということを考えて、荒川の東・岩槻の西に分布するものが中心となる。まず、その北部にツチグモが分布している。川越の東部にも分布が認められるほか、各地に点在しているのがわかる。浦和の近辺その他には、微弱ながらジグモが分布している。同じくその東には、ジグモツチグモから転じたドログモが数ヶ所に見られ、遠く南にも三地点ほどの分布がある。フクログモは荒川の南部流域にややまとまって分布するほか、やはり各地に点在している。アナグモは、浦和と所沢の中間あたりに弱い領域を占めながら分布し、他と同様に各地に点在している。このようにハラキリ類を東西に分断したと見られる新しい語形は、ある一定の分布領域を占めているようにも見えるが、いずれの語形の分布も散漫であって強い勢力があるとは思われない。

また、新語形同士の分布領域も入り混じっていたり、言語地理的な解釈に耐えられるような隣接分布をなしてはいないようである。たとえば、ツチグモは荒川東側の北部に分布がみられたが、そこにはフクログモの分布も認められ、ツチグモの分布領域を侵そうとしているかにも見える。が、この推定は必ずしも当たっているとは言えない。なぜならば、フクログモの南側（東京）にもツチグモの分布があって、北上してフクログモの分布を侵すような新勢力であるとも考えられるからである。同様のことは、アナグモとツチグモ、アナグモとフクログモその他についてもあてはまるようである。したがって、これら新語形同志の先関係係を明らかにすることも容易ではないと思われる。すなわち、どの語形が最初に分断の役目を果たし、

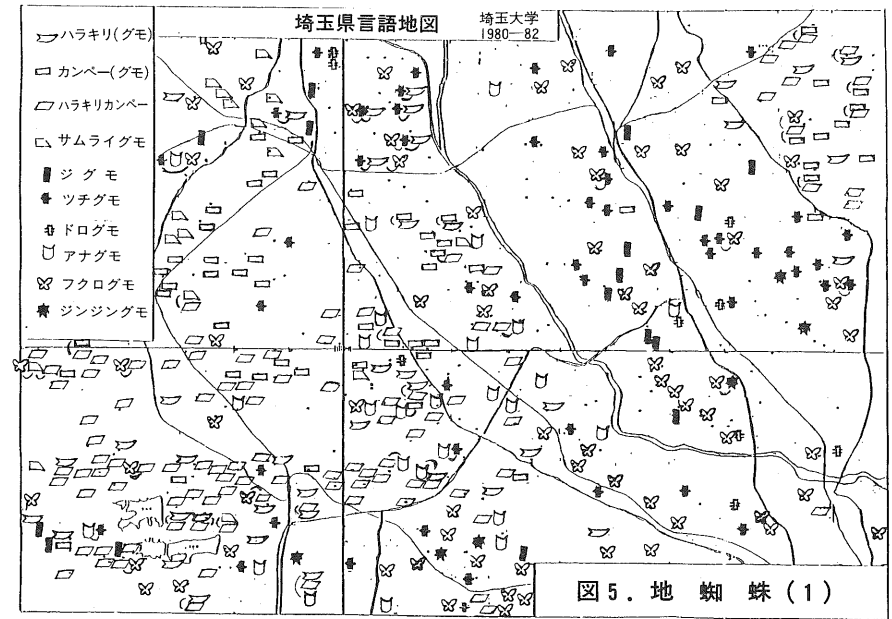


図5. 地蜘蛛(1)

どれがその後を襲ったのかという、分断過程の解明が非常に困難なのである。
 むしろ、この二つのこと——分布領域の不明確さと分布序列の不齊——から、これら新語形はそれぞれの地域で発生したものであると考えるのが自然で無理がないように思われる。分布領域が不明確であるということは、ある語形と他の語形との地理的な境界が不明確であるということである。そのような接触地帯では、二つの語形がかなり自由に交換しうる状況にあると考えられる。このことは、各語形間の併用地点が多いことから推定されよう。そしてさらに、接触地帯の話者の、二つ(以上)の語形に対する心理的な境界もあいまいであるとも推測される。もちろん、会話の場面によって境界が明確に意識され二つ(以上)の語形が使い分けられる場合から、まったくアト・ランダムに発話される場合まで、無限の段階が想定されるにしても、当然、このような状態に至るまでには種々の要因があるものと思われる。語形同士の新古の差を意識してのことであるうし、場面(文脈)差であるかもしれない。まったくの併用となつてしまった場合もありうるだろう。しかしながら、これらの可能性を否定し去らないまでも、新語形の分布が隣接せずそのために語形間の新古が明らかにしたいことを考え合わせると、他の可能性を考える必要があるように思われる。

かく、新語形は、その各々が生態に着目した命名であつて、直接的でわかりやすいという点で共通していると考えられよう。このような共通点があるということは、生態に着目するという視点が話者にはあり、そこから引き出される種々の語形のうちの一つが、ある要因で選択されたり無契機に発話されたりすることがあるものと思われる。もちろん、この推測のような行為は、話者が我々に情報を提供しているときのこととも考えられるし、日常の会話の一回ごとでも行なわれる恒常的な習慣であるかもしれない。このように話者一人ひとりの選択の余地がある一方では、新語形が弱いながらも一定の分布領域を占めているのだから、語形そのものは各地域ごとに選択され、ある程度の定着をみたものと考えたい。その場合でも、命名法が直接的なものであるから、新語形のどれが選択され定着しても他の語形を生み出す契機はあつたと考えられよう。そのために分布領域が明確でなかったり、互いの語形の新古が推定しにくいような分布になったのだと考えられるのである。このような推測は、新語形間の分布領域の不明確さ・分布序列の不齊一さを解釈するうえで有効な仮説であるものと思われる。

そこで、これらの新語形をまとめた一つの勢力としてみることができよう。そのような観点から地図を描きなおしてみると図6になる。新語形は全て■で表わしてみた。すると岩槻中心部などの部分的に沿わない地域があるものの、図2で0.3以上の数値の地域に新語形の分布が多くみられ、一般的な伝播・分布の傾向によく合致しているのが知られるのである。さらに、新語形の共通点が命名の着眼点であることを考えあわせると、命名の着眼点そのものが一般的な言語伝播の傾向に乗って伝播していった可能性も考えら

図6. 地蜘蛛(2)

れるのである。このように考えることで、埼玉南東部地方における「地蜘蛛」の語形の違例的な伝播も解釈できるように思われる。命名の着眼点は正常な伝播をし、それをもとにして地域ごとの命名が行なわれた。その結果、語形の分布が入り乱れるようにもなり、語形レベルの分布・伝播が違例的なものとなったのであろう。もちろん、命名の着眼点は、「地蜘蛛」そのものを端的に表現しうるものであるから、語形の選択が話者（言語使用者）一人ひとりに任されている面もあることは見落せない。

したがってこの場合の違例的な伝播とは、語形レベルのものであって、いわば見掛けの上での違例的伝播であったことになる。このような命名法の伝播という推定は早く長尾勇氏の指摘^{注7}があつて周知のことであろう。ここでは、図2のような一般的な言語伝播の傾向（あえて言えば、経路）との一致から、氏のお考えを裏付け、一歩進めることができたものと考え次第である。

五 まとめ

「明々後日」「地蜘蛛」の検討を通してみられたのは、埼玉県南東部地方の話者の、主体的な言語へのかかり方であつたと言えるだろう。「明々後日」の場合は、同音衝突による混乱を避けるために発揮された中央語の拒否、あるいは選択という行為であつた。そして、それらは地理的な要因もさることながら、話者一人ひとりの判断に任されていると考えられるものであつた。また、「地蜘蛛」の場合では、命名の着眼点という言語以前のものが言語伝播の経路上に乗りうるものであることを裏付け得た。これらの知見は、一般的な伝播というものを認め、それに対する違例的な伝播・分布を見直すとい

う作業を経て初めて得られたのだと考えられる。もしこのような見方をしなかったらどうか。「明々後日」では、その分布の状態からヤノアサツテが古形であることを認めるにとどまり、本稿のような考察はできなかったかもしれない。ことに川越の分布が、単なる古形の保存としてだけではなく、地域的な特殊性の現れである可能性を指摘できた。その意味では、「明々後日」の地図を平面的に捉えることから一歩前進してより深い読みができたように思う。「地蜘蛛」では、命名法の伝播という事象を認めることも裏付けることもできなかったであろう。

このようなことから、筆者は、言語の伝播・分布の研究を積極的に進める価値があるものと信ずる。そして、伝播・分布パターンの研究法の一つとして、本稿でとりあげたような当該地方の一般的な伝播・分布の把握、これに異なる伝播・分布の解釈という作業が有効であると考えるものである。今回の検討から筆者の知り得たことがらは多かつたものの、種々の点でさらに考察していかねなければならぬことであろうし、本稿の提示した方法だけが伝播・分布パターンのアプローチではないだろう。今後の課題は多いものと考えている。

注

- (1) 柴田武「言語地理学の方法」（筑摩書房 昭和44年）11ページ。
- (2) 注1と同書、40ページ。
- (3) ①柴田武「埼玉県南部・東京都北部地域の方言分布(1)」(「人口急増地帯としての埼玉県における言語接触とその問題点に関する総合的研究(昭和58年度文部省科学研究費補助金による研究成果報告)」昭和59年)、②同「同(2)―アクセント―」(「埼玉大学紀要教養学部第19巻」昭和58年)、③同「同(3)」(「同第20巻」昭和59年)などを参照されたい。

長尾勇「地蜘蛛考」(『国語学』19 昭和29年)
(東北大学大学院文学研究科)

(4) このマスメは五万分の一の地図形をタテヨコに十等分して得られるものである。

(5) ただし、川越の場合は個人的な選択と地域的な同一性が現われたと考えたい。この付近は他の地図でも周辺地域とは異なった語形が分布することがある(注3の①「おてだま」などを参照)。また、近郊に住む何人かの話者は「川越旧市内とは言葉が違う」と報告している。川越は周辺地域と断絶あるいは孤立する面と言語伝播の「中心」としての面を兼ねているように思われる。このような性格が「明々後日」の場合合にも現われ、シアサツテ明々後日を地域的に残したものと思われる。

(6) ただし、腹切りという習性に着目する傾向が衰退し「地蜘蛛」を表す語形が失われてしまつて、生態に着目する直接的な命名を行なわざるを得なかつたことも考えられる。その場合は「命名法の伝播」を認める余地はない。そして、荒川東側などの無回答の地点が多いことをその証左とすることもできよう。ただし、この付近の話者の多くは、「地蜘蛛」は見えたこともないという報告をしているのである。また、習性による命名・語形の衰退した地域は、図2の傾向に符合している。なにゆえ符合するのかという説明がなされない以上、「習性着目による命名法の衰退」という推定が成り立つ可能性は低いものと思われる。

(7) 「俚語に関する多元的発生の仮説」(『国語学』27 昭和31年、『日本の言語学第6巻方言』(大修館書店 昭和53年)所収)

(8) 例えば、森下喜一「山形県最上地方における語の伝播パターンについて」(『国学院雑誌』866 昭和54年)など。

参考文献

- 国立国語研究所『日本語地図』6 (昭和49年)
- 佐藤亮一「言語地図からみた「しあさつて」と「やのあさつて」」(『言語生活』284 昭和50年)
- 同「方言の分布」「しあさつて」と「やのあさつて」(徳川宗賢編『日本の方言地図』中央公論社 昭和54年)